紫宸殿上に於ける天皇及び公卿らの沓の着脱について

—儀式時の検討—

STUDY ON TENNO'S AND THE ARISTOCRAT'S (KUGYO)
PUTTING-ON-AND-OFF-THEIR-FOOTWEAR
ON THE FLOOR OF "SHISHINDEN"

—Study at the rituals—

飯淵 康一*, 永井 康雄**, 安原 盛彦***

Kouichi IIBUCHI, Yasuo NAGAI and Morihiko YASUHARA

In this thesis the actual conditions of Tenno's and the aristocrat's(Kugyo) putting-on-and-off-their-footwear(shoes) through rituals on the floor of "Shishinden" in the Imperial Palace of Heiankyu are described. Especially considering the aristocrat's(Kugyo) way which was different from other ritual way, they were granted a privilege of stepping into "Shishinden" putting off their footwear at the time of the rite to mark Tenno's attainment of manhood(Genpuku). The reason from which this style come is that Chinese(Tang) style was imitated at this time of Seiwa Tenno's era.

Keywords : Heian era, Shishinden, ritual, footwear(shoes), seats

平安時代, 紫宸殿, 儀式, 沓, 座具

序

周知の様に、平安宮内裏に於いては様々な儀式・行事が行われていた。これらは主として紫宸殿、清凉殿、仁寿殿、及びそれらの前庭を会場としていたが、その多くは天皇が出御し公卿らが参加することで成り立っている。

天皇や大臣以下参議以上の公卿らとともに正装し、また履物もこれに相応しいものを用いていた。

ところで、内裏で行われた年中行事の具体的様子は部分的にはあるが「年中行事絵巻」により知ることが出来る。仁寿殿を中心とした儀式「内宴」についてこの絵巻をみると、公卿らが沓を着けたまま昇殿しているのが知られる。仁寿殿も含め、紫宸殿を中心とした内裏の諸殿舎は板張りの高床式建築であったことを思うと、これら公卿らの姿は現代の我々にとってかなり奇異に映る。

この点に関し鈴木亘氏は、紫宸殿上に於いて朝臣は沓をつけるのが例であり日常の遊宴の場合も同様であったと指摘し、またこれは皇太子および朝臣の座として椅子、床子、兀子、草墊などが用いられたことから推定されるとしている¹⁾。然しながら後述するよう公卿らが沓を着けずに昇殿する場合もあり²⁾、従来公卿らの履物の着脱について、特に儀式時のそれについて十分な検討がなされて来たとは言い難い。

本論では平安宮の中心殿舎・紫宸殿に於ける儀式を取り上げ、これに参加した天皇及び公卿らの履物・沓の着脱の実態を履きかえも

含め、用いられた座具に着目しながら明らかにしたい。また公卿らについては、紫宸殿上に於けるその違いの要因を解明し、その意味についても考察してみたい。なお「沓」は挿鞋、靴、浅履、舄、履を含むいわゆる「くつ」の総称とすることにする。

1. 元日節会について

—公卿らが沓を着けたまま昇殿する場合<その1>—

平安宮内裏紫宸殿で行われた年中行事について、当時著された儀式書や貴族達が遺した日記等を渉猟するとき、これに参加した公卿らが沓を着けたまま庭上より昇殿した例として、まず元日節会を初めとする諸節会および旬儀をあげることが出来る。本章ではその代表的例として元日節会を取り上げ検討することにしたい³⁾。なお後掲・図-1は儀式の会場となった紫宸殿を中心とした部分を示したものである。適宜参照していただきたい。

さて、元日節会は、正月朔日に天皇が大極殿で群官の朝賀を受けた後に、場所を内裏紫宸殿に移し行われた宴である。その式次第は「江家次第」⁴⁾等の諸儀式書に詳しく、天皇出御、内弁大臣昇殿着座、開門、公卿昇殿・着座、羞饌・盃事、奏覧、賜祿、退出、天皇還御の順に行われた。

会場として紫宸殿および南庭が共に用いられたが、天皇の御座は母屋中央間に南面して置かれ、公卿の座は御座の東側に東西行二行に南北相対して設けられた。「江家次第」は御帳内の天皇の御座に

本論は1997年6月及び1998年6月に日本建築学会東北支部研究報告集に発表した沓の着脱に関する論文をもとに纏めたものである。

* 東北大学大学院工学研究科 教授・工博

** 東北大学大学院工学研究科 講師・博士(工学)

*** 東北大学大学院工学研究科 大学院生・工修

Prof., Graduate School of Engineering, Tohoku Univ., Dr. Eng.

Lecturer, Graduate School of Engineering, Tohoku Univ., Dr. Eng.

Graduate Student, Graduate School of Engineering, Tohoku Univ., M. Eng.

ついて、

次撤尋常ノ御椅子、鋪唐錦毯代、立平文御椅子、鋪唐錦褥とし、公卿座については

當御帳東第二間中央、東西兩行設親王公卿座、鋪鋪紺ノ布蠻繪兩毯代（・・・割註略・・・）⁵⁾

立兀子獨床子簀子敷床子等（北親王參議座、南大臣大中納言三位參議散三位參議座、並西上對座）

と記している。即ち、天皇は平文御椅子を、大臣以下參議以上の公卿は兀子、床子を座具として用いた。これらはいずれも脚を持つ腰掛けであるが、椅子は背もたれ及び肘掛けを持つ点で他とは異なっている。

さて、主な参加者たる天皇、内弁大臣、公卿のそれぞれについて、式次第に従い沓の着脱の具体的様子を明らかにしていこう。

天皇は普段の御所たる清凉殿より出発し、長橋を経て一時紫宸殿北廂に控え、母屋の御帳に着御する。ここで公卿を迎え宴になる。三献ののち公卿は退出し、天皇も清凉殿に還御する。

天皇は清凉殿を出発するに際し挿鞋を着用した。「建武年中行事」⁶⁾によれば、清凉殿二間の前で関白が挿鞋を奉ったことが知られる⁷⁾。挿鞋は、「装束抄」⁸⁾に示されるように天皇が常に用いた沓であり、[そうかい]と称される。この沓をつけたまま、紫宸殿北廂に入るのであるが、ここで「江家次第」に

先於北廂着靴給

とされる様に靴に履きかえ、御帳の中の椅子に着御する。靴は「装束抄」に

朝賀。小朝拝。節會。内宴等二天子モ召。臣下ハ此外即位。行幸。行啓。列見。定考。駒牽。讓位。立后。立太子。任大臣。釋奠等ニモ是ヲ用ユ

とあるよう儀式のための正装の沓で[かのくつ]と呼ばれた。天皇は儀式終了までこの靴を着けたまま紫宸殿上に御座すのである。

内弁とは、式の進行を主導した官人を言い、節會に於いては大臣がこれを務めた。天皇の出御に際し、内弁はそれまで控えていた紫宸殿東腋の陣座から宜陽殿西庇に据えられた兀子に着く。ここから軒廊を経て南庭に出、謝座⁹⁾再拝の後、紫宸殿東階より昇殿・着座する。ここでの宴（三献）の後、再び陣座につき、宣命等を取り昇殿し降殿、さらに副宣命を取り昇殿また降殿したのち南庭に列立、ここで拝礼を行った後、四たび昇殿そして降殿し日華門より退出するのである。

さて、内弁は宜陽殿に着く前、陣座で靴を着けた。「江家次第」はこのことについて

先於陣座御着靴之後、聞近仗警聲

と記している。内弁は靴を着けたまま第一回目の昇殿を行い、着座、また降殿し陣座に着くが、同記に

脱靴云々

とある様、ここで靴を脱いだ。

この後、儀式終了までの内弁の靴の着脱については詳らかになし得ないが、恐らくはこの後の昇殿の際は陣座で同様に靴を着けたものと思われる。

公卿は宴を賜わる側の参加者である。公卿は控えていた陣座から東脇の敷政門を出、左兵衛陣たる宜陽門を経て内裏内郭の東南角、鳥曹司に至る。そして南門たる承明門外につき、ここから門内に参

入し南庭に列立する。謝座、謝酒¹⁰⁾の後、紫宸殿東階より昇り座に着く。宴（三献）の後、降殿し南庭に列立して拝礼、また昇殿ののち降殿、祿を受取り日華門より退出する。

公卿は「江家次第」に

入鳥曹司東戸着靴、出南戸

とある様に鳥曹司で靴をつけ、そのまま承明門より南庭に入り、こののち昇殿するが儀式終了時まで靴を着けたままであった。「三節会次第」¹¹⁾より類推すれば、日華門より退出の時、浅履に履き替えたと考えられる¹²⁾。なお、南庭に参入する際には上述のように鳥曹司で靴を着けたが、それまでは浅履を着けていたものと思われ、ここで履きかえたものと推される。浅履は公卿らが常に用いた沓であり[あさぐつ]と呼ばれた

後掲・表-1は以上述べてきた天皇、内弁大臣、公卿について、式の次第に従いそれぞれの動きを座具と沓の着脱に注目し整理したものである。紫宸殿に於いて、天皇は椅子を御座とし、公卿は兀子、床子を座具として用いていた。天皇は母屋の御座に出御する際には靴を着用し、内弁、公卿らは、内弁が降殿の際に陣座で脱靴したものの、共に靴を着用したまま昇殿したことが知られよう。

諸儀式書をみると、以上述べたことは元日節会のみならず七日節会、十六日節会、豊明節会に於いても同様であったことが知られる。

2. 釋奠内論義、相撲召合について

一公卿らが沓を着けたまま昇殿する場合〈その2〉-

釋奠内論義、相撲召合に於いても公卿らは沓を着けたまま昇殿したものと思われる¹³⁾。

釋奠とは、孔子やその弟子を祀る儒教儀礼を指し、大学寮の廟堂、都堂を会場として行われた。内論義はその翌日、紫宸殿に諸博士等を召して論義を行い、天皇がこれを傍聴したことを言う。この儀は天皇出御、公卿昇殿、博士・座主・学生参入昇殿、論義、天皇還御から成っていた。

天皇の御座は母屋中央間に南面して、公卿座は南廂東第一二三間に設けられた。「西宮記」には天皇の御座について

南面母屋六間懸御簾、更北折同懸之、「副」東御簾、立御屏風三帖、西第四五六間敷廣筵、立大床子二脚（有毯代）

とあり、公卿座については、「江家次第」に

南廂東第一二三間南邊、去柱二許尺立兀子床子爲公卿座（北向大臣南面、納言緑、三位參議獨床子、四位參議長床子、並黃端敷物）と記される。即ち、天皇の御座は脚を持つ大床子を二脚並べたものであり、公卿座には兀子、床子が用いられた。

当日、天皇は清凉殿より出発し、紫宸殿の御座に着き論義を聴くが、諸儀式書には沓に関する記述は見られない。

公卿は昇殿し、上述の座に着くが「西宮記」に

王卿昇（着靴）

また「江家次第」にも

王卿以次参上（着靴、遅参者不参上、依博士等参上之後無道硬敷）とあるよう靴を着けたまま昇殿したことが知られる。儀式終了後は日華門で脱靴し退出した¹⁴⁾。

相撲節会は、毎年7月に諸国から召し集められた相撲人による相撲を天皇が御覧になる儀式で、しつらい等の準備を行う召仰、稽古

のための内取、天皇が観覧する召合、拔出・追相撲がそれぞれ日を設定して催された。ここでは中心となる〈召合〉をとり上げ検討したい。

「江家次第」等の諸儀式書によれば、この儀は、天皇出御、大臣大将昇殿、公卿昇殿、競技・羞饌・盃事、穩座、天皇還御、公卿退下の順に行われる。

天皇の御座は南庇中央間に南面して置かれ、公卿座は南庇東一二三間、内弁大臣座は南簀子に設けられた。天皇の御座について「江家次第」は

額間設御座敷紫二色綾毳代、立座蔭大床子一雙、鋪高麗褥（近例其上供圓座一枚）

とし、公卿座について

當南廂御簾東三間敷滿長筵、其上南北對座敷帖二行、（並東西行）爲親王公卿座、（親王大臣紫端、納言綠端、參議黃端帖等也）

内弁大臣座については

南廂之南簀子當御簾東端、以東三ヶ間東西行敷巨長筵其御簾東端簀子敷筵一枚（爲内辨大臣座、南北妻）

とそれぞれ記している。則ち天皇座は釋奠内論義と同様大床子二脚であるが、公卿座には畳、内弁座には筵が用いられた。後掲・図一2は「雲図抄」¹⁵⁾に示される相撲節のしつらいである。

諸儀式書により杳の着脱が知られるのは天皇と大臣大将であるので、この両者について検討することにしたい。

天皇の南殿への出御について「江家次第」に

已刻御南殿（御位袍延喜五年趨塵搦鞋、不例御時御直衣）内侍取劍璽候前後（…割註略…）執柄人候御裾命婦藏人各四人扈從、藏人持式御篋（經長橋南殿北面西戸、有筵道、自南廂西間入御、須御大床子、…以下略）

とあり、天皇は搦鞋を着け、清涼殿から長橋を経て紫宸殿の御座・大床子に至ったことが知られる。その後、杳のはきかえや着脱に関する記述は見られず、このまま儀式終了にまで至ったものと思われる。

大臣大将についてはやはり、同記に

大臣大將先昇（淺履…以下割註略）

と記されている。大臣大将がどの座に着いたのか、即ち公卿座なのかあるいは内弁座なのかについて具体的記述はないが、いずれにせよ淺履のまま昇殿したことが知られる。但、これら座についた時に履物を脱いだか否かは明らかではない。

相撲召合と同様に大床子が御座として用いられた例として御覽陸奥交易御馬事があるが、天皇は同様、搦鞋を用いていた¹⁶⁾。

以上の様に、釋奠内論義、相撲召合に於いて、天皇の御座としてはいずれも大床子が用いられたが、公卿らの座として前者では兀子、床子、そして後者では畳、筵がそれぞれ使われていた。また天皇は、後者に於いて搦鞋を着用したが、公卿について見ると前者では靴を、後者では大臣大将が淺履を着け昇殿したのである。

3. 天皇元服について

一公卿〈太政大臣・大臣〉が杳を脱ぎ昇殿する場合一

天皇元服儀に於いて、太政大臣・大臣は天皇が出御した紫宸殿に杳を脱いで昇殿した。この様な儀式は天皇元服儀以外には認められない。

天皇元服は一代一度の重要な儀式であり、その次第は諸儀式書のみならず、貴族達の日記からも窺うことが出来る。天皇元服は理髪、加冠、羞饌盃事、公卿等参入拝舞、還御の順に行われた。

天皇の御座は紫宸殿母屋中央に設けられたが、この御座は加冠、羞饌盃事の時と、公卿参入拝舞の時とは異なり、前者については「江家次第」に

御帳下敷縹端大帖二枚、其上敷土敷一枚（龍鬘筵）其上敷茵一枚（東京錦）

と記されるように、縹端大帖に筵を敷きその上に茵を置いたものであり、後者については同記に

女官依例裝束立御椅子

とある様、椅子が用いられた。一方、大臣を含めた公卿らの座は節会の場合と異なり紫宸殿上に設けられていない。

当日天皇は清涼殿より紫宸殿北廂に入り理髪。次いで母屋の御座すなわち縹端大帖の上に筵を敷き茵を置いた御座に出御する。ここで太政大臣、大臣による加冠、理冠があり、その後北廂に入りさらに理髪する。再度、母屋の御座に出御し、太政大臣、大臣から盃、肴物を受けまた北廂に入る。再度母屋に出御し、それまでの茵に代わり置かれた椅子に着御する¹⁷⁾。ここで南庭に列立する公卿以下の拝舞を受け、その後還御するのである。

杳の着脱の点から見ると、天皇は紫宸殿北廂に向かうに際し、清涼殿朝餉で装束、糸鞋を着している¹⁸⁾。糸鞋は天皇が幼少の時用いる履物であり〔しかい〕¹⁹⁾と呼ばれた。この糸鞋を脱ぐのは加冠の後、盃・肴を受けるために母屋に出御する時である。永久元年（1113）正月1日の鳥羽天皇の元服に関し「殿曆」によれば、

脱糸鞋、著御草鞋出御（於御帳下脱草鞋）

とあり、糸鞋から草鞋にはきかえ、御座に着く際これを脱いでいる。ここに記される草鞋は元日節会および相撲召合の際に紹介した搦鞋のことと思われる²⁰⁾。天皇は公卿らの拝舞を受けるため再び出御し椅子に着くが、この時には靴を履いた。即ち「北山抄」に

皇帝出自北廂、着御椅子〔着御靴〕

とされる。なお、還御の際にはこの靴を搦鞋に履きかえている²¹⁾。この様に天皇は紫宸殿上に於いて糸鞋を着けたが、加冠即ち成人後は搦鞋を用い、また椅子に着く時にはこれを靴に履きかえたことが知られる。

太政大臣と大臣は加冠・理冠および盃・肴物を進める役として庭から昇殿する。これに先立ち両者は靴を着けるが、「愚昧記」嘉応3年（1171）正月3日条²²⁾に

次太政大臣降自南殿御後東階（壁外）。着靴、左大臣出陣駭着靴。

とされるよう太政大臣は紫宸殿後の東階を下りた壁外で、また大臣は陣座の腋でそれぞれ着けた²³⁾。南庭での再拝ののち太政大臣は西階より、大臣は東階より昇るが、前者については「殿曆」永久元年（1113）正月1日条に

手水了昇西階（右足爲先、於一級脱靴）階南邊を昇

後者については「江家次第」に

大臣詣東壇洗器之下盥手（同上）昇自東階（脱靴）

と記されるように、昇殿に際しそれぞれ靴を脱いだことが知られる。昇殿した両者は天皇の前に進み跪き加冠、理冠した。終了後再び降殿するが、太政大臣については「殿曆」永久元年（1113）正月1日条に

余掛廻右下西階、右足爲先、著靴入自無明門

とされる様に、この時再び靴を着けている。大臣についてはこのような記述を見いだすことは出来なかったが、太政大臣の場合と同様であったものと思われる。両大臣が再び昇殿するのは、北廂から改めて母屋の御座に出御した天皇に盃・肴物を進める時である。この時の昇殿に関し「江家次第」は太政大臣について

太政大臣洗手、登自西階（脱靴）

大臣については

大臣洗手、昇自東階（脱靴）

と記している。やはり両者とも昇殿するに際し靴を脱いだ。このうち再び降殿するが同記に

退降立於西階下（着靴）降自東階（着靴）

とそれぞれ記され靴を着けたことが知られる。

この様に太政大臣および大臣は昇殿に際し靴を脱ぎ、降殿の時には靴を着けたが、この件について「中右記」大治4年（1129）正月1日の崇徳天皇元服条に興味深い記載がある。

右大臣於東壇上乍立洗手了（諸司奉仕）不脱靴、登自東階、南行西折、立簀子敷第二間掛、（西面、内大臣以下諸卿密々於東階邊窺見、人々談云、不被脱靴如何、若是有別脱靴、但太政大臣已脱靴給、不同也、此事人々有奇氣）

即ち靴を脱がずに昇殿した右大臣は公卿らに非難されたのであった。

両大臣の昇降殿に際しての沓の着脱に関する記述は以上の様であるが、昇殿はしなかったものの南庭で拝舞した公卿らの沓の着脱についても一瞥しておきたい。元日節会の際には公卿は鳥曹司で靴を着け承明門より参入したが、元服の場合は、高倉天皇の例を「愚昧記」の嘉応3年（1171）正月3日条でみると、廻廊の辺で着靴したとある。「玉葉」同日条には鳥居曹司の東庭とされるので元日節会と同様であったと考えられる。公卿らは南庭での拝舞のち退出するが、同記によればやはり同じ辺りで靴を脱ぎ浅履にはきかえたことが知られる。

さて、今まで述べてきたことを、天皇、太政大臣・大臣及び公卿も含め、式の次第に従いそれぞれの動きを座具と沓の着脱に着目し、元日節会の場合と同様に整理したものが後掲・表-2である。

天皇は紫宸殿母屋で冠を受け、また盃・肴物を進められるが、これらは何れも縹端畳に龍鬘簀を敷き更に茵を重ねた御座に於いてであった。履物についてみると、清涼殿を出る時から糸鞋を用いていたが、加冠ののち再度御座に出御する時には挿鞋に履きかえ、さらに御帳下でこれを脱いでいる。また南庭に列立する公卿らの拝舞を受ける時には椅子を御座としたがこの時は靴をつけた。一方、太政大臣・大臣は加冠・理冠および盃・肴物を進める際に昇殿したが、このいずれの場合にも靴を脱いだ。しかしながら降殿の時にはこれを着けている。

4. 昇殿者の脱沓の要因およびその意味について

以上、平安宮内裏で行われた元日節会、釋奠内論議、相撲および天皇元服を取り上げ、天皇と公卿らについて、紫宸殿上と南庭に於ける沓の着脱を、用いられた座具に着目しながら明らかにしてきた。これらを整理しまとめたものが後掲・表-3である。

天皇は清涼殿で挿鞋あるいは糸鞋を着け紫宸殿に至ったが、御座

が椅子の場合はここで靴に履きかえている。大床子に着く場合は必ずしも明確ではないが、縹端畳に龍鬘簀を敷きその上に茵を重ねた御座の場合はここで挿鞋を脱いだ可能性がある。

公卿らについてみると、紫宸殿上に靴を着けて昇殿した場合の座具は脚を持つ兀子、床子であり、浅履の場合は畳もしくは簀のいずれかであったと推される。兀子、床子に着座した時には靴のままであったと思われるが、畳・簀などに着いた場合に浅履を脱いだか否かは不明である。

以上の様に天皇、公卿らそれぞれについて座具の種類と沓の着脱との相関々係をみると必ずしも明快ではない。然しながら、天皇の座具と公卿らの沓の着脱に着目するとき、これらの間には興味深い関係が認められる。即ち、天皇が椅子や大床子に御座した場合に対し天皇元服にみたように、畳に簀、その上に茵を重ね敷いた御座の場合は、公卿ら（太政大臣・大臣）は沓を脱いで昇っていた。

この様な御座は平敷（ひらしき）と呼ばれたが²⁴⁾、これに関し「新儀式」²⁵⁾の天皇元服の項には御座に関し注目すべき記載が認められる。

案。晋禮設大床。唐禮鋪筵席。貞觀元慶之例依唐禮設平鋪。今案。土敷上加御茵。

即ち、貞觀6年(864)の清和天皇、元慶元年(877)の陽成天皇の元服の際には、唐禮に倣って平敷を用い、晋禮の大床を採用しなかったと言うのである。事実これ以降の天皇元服については「中右記」大治4年（1129）正月5日条に、

助教信俊來談云、我朝 和帝初御元服時、大江音人卿引唐禮元服儀作出式也、其後用件式也、

と見える様に唐禮に倣い、従って天皇の御座として平敷が用いられるようになった。

中国・唐代の儀式内容を具さに記したのものとして「大唐開元禮」（以下「開元禮」とする）²⁶⁾をあげることが出来るが、卷第九十一には我国の天皇元服に相当する皇帝の元服に関する記載がある。皇帝の元服は大極殿で行われたが、

先一日尚舍奉御設御冠席於太極殿中楹之間南向莞筵紛純加藻席績純加次席黼純

とされ²⁷⁾、縁飾のついた筵類を重ね皇帝の御座としていた。言はばこの御座は平敷に相当する。

一方、晋書²⁸⁾には

江左諸帝將冠、金石宿設、百僚陪位。又豫於殿上鋪大牀、

と記され、唐代に先行する晋代では大牀が御座として用いられたことが知られる。大牀は筵とは異なる台状の座具と考えられる。「新儀式」でこれを大床と記したのは上記の通りである。即ち、晋代と唐代とでは皇帝の座具に相違があり、我国の清和天皇以降の天皇の元服の御座は唐に倣い平敷とされたことが確かにここで知られる。

それでは天皇元服に於いて公卿（太政大臣・大臣）が昇殿するにあたり沓を脱ぐ様になったのは何時からなのであろうか。平安期に於ける天皇元服の記録を通覧すると、これが最初に知られるのは後一条天皇についての「御堂関白記」寛仁2年(1018)正月3日条であり、従って厳密に言えば清和天皇の貞觀6年(864)からであったか否かについては確かめることが出来ない。然しながら前述の「中右記」大治4年(1129)正月5日条に清和天皇の時から唐禮に倣って儀式を行ったとあるので、沓を脱いで昇殿するのもこの時まで遡ると考え

るのが極く自然なことであろう。

以上の様に天皇元服に於いては清和天皇の時から御座を平敷にし、また昇殿者が沓を脱ぐ方式も、この時から受け継がれてきたと考えることが出来よう。

さて、11世紀初期に成立したとされる「北山抄」²⁹⁾には、天皇元服に関し以下の様に記されていた。

太政大臣西度、〔記文云、度馳道〕詣西壇洗器下、盥手、昇自西階、東向而立、〔記文云、自簀子敷南行、東折當南廂西第二間立、因御座平敷、脱履也〕<下線筆者>

即ち太政大臣が昇殿する際、沓を脱ぐのは天皇の御座が平敷であるためと言うのである。果たしてこの様な理解も唐禮の影響なのだろうか。

「開元禮」は我国の儀式に最も大きな影響を与えた儀式書とされているが、この書に於ける大極殿での儀式をとり上げ、皇帝の座具と昇殿者の沓の着脱との関連々係について検討してみよう。「開元禮」には我国の紫宸殿に相当する殿舎での儀式は記されていない。唐代の大極殿では上述の皇帝の元服のほか我国の元日節会に相当する(元正)會も行われている。

太極殿で行われた儀式のうち殿上に昇殿者のあるものとして、卷第七十九・蕃主奉見、同九十一・皇帝加元服(臨軒行事)、同九十五・皇帝元正冬至受皇太子朝賀、同九十七・皇帝元正冬至受群臣朝賀・會、同一百三・太極殿讀五時令、同一百十一・皇太子納妃(臨軒醺戒)をあげることが出来る。これらについて皇帝の座具およびその舗設を見ると、蕃主奉見は北壁に御幄を整設し御座を、皇帝元服は前述の様に筵類を重ねたものを、受皇太子朝賀は北壁に御幄座を、受群臣朝賀・會は御幄を設け北壁下に御座を、讀五時令は北廂に御幄座を、皇太子納妃では阼階上西向きに御座を設けたとされるが、元服以外に具体的な座具を知ることが出来ない。また昇殿者の沓の着脱の記載は受群臣朝賀・會、讀五時令および皇太子納妃に於いて認められる。まず朝賀についてこれをみると、南庭に参入した王公のうちの上公は

訖通事舍人引上公一人詣西階公初行樂作至解劍席樂止公就席脱履跪解劍置於席俛伏興通事舍人引升階進當御座前北面跪賀稱某官臣某言元正首祚景福惟新伏維開元神武皇帝陛下與天同休(冬至云天正長至伏維陛下日之升)如俛伏興通事舍人引降階詣席後上公跪著劍俛伏興納履樂作<下線筆者>

と記される様に昇殿し奏賀するが、その際大極殿の南方横街の南に設けられた解劍席で剣を外すと同時に脱履すなわち沓を脱ぎ、また降殿の際はここで納履つまり沓を履いたことが知られる。舄は二重底の沓のことである。會に於いても同様で、これに参加した公王以下について

通事舍人引應升殿者詣東西階公初行樂作至解劍席樂止公王以下各脱履跪解劍置於席上俛伏興…<中略>…羣官客使等上下皆俛伏起立席後通事舍人引降階俱詣席後跪著劍俛伏興納履樂作復横街南位樂止<下線筆者>

とあり、同様、昇殿に際しては脱履、降殿の時は納履した。他に樂人など³⁰⁾に関する記述があるがこの場合は

升座者脱履如式<下線筆者>

とされる様に、昇殿し着座する者は脱履即ち沓を脱ぐのが定式であった。履は、一重底の沓を指している。

讀五時令では公王以下および刑部郎中が解劍席で脱履し昇殿、また降殿し納履したことが、皇太子納妃でも皇太子が昇降殿の際にそれぞれ脱履、納履したことが知られる。

ところで、これら儀式で用いられた御座あるいは御幄座と記された皇帝の座具はどのようなものであったのだろうか。大極殿で行われた他の儀式も含め「開元禮」を検討しても詳らかにすることは出来ない。

然しながらこれに関し「舊唐書」³¹⁾志第二十四、職官三には凡元正、冬至大朝會、則設斧展於正殿。(施躡席薰鑪。朔望受朝、則施幄於正殿、帳裙頂帶方闊一丈四尺也)<下線筆者>

また、「新唐書」³²⁾志第十三上・儀衛上、志第三十七・百官二にもそれぞれ

・元日、冬至大朝會、宴見蕃國王、…(中略)…朝日、殿上設黼展、躡席、薰鑪、香案。<下線筆者>

・大朝會、設黼展、施躡席、薰鑪。朔望、設幄而已。<下線筆者>

という記載があり、朝賀・會および宴見蕃國王に於いて躡席、躡席が皇帝の御座として用いられたことが知られる。これら御座について「唐六典」³³⁾殿中省卷第十一には

凡元正、冬至大朝會、則設斧展於正殿。(施榻席及薰鑪…以下略。)<下線筆者>

とあるように「舊唐書」「新唐書」の躡席、躡席は榻であったことが知られるが、「唐六典」³⁴⁾卷之十一にも

凡元正冬大朝會、則設斧展於正殿、施榻(旧唐志、榻作躡、新唐志、榻作躡)<下線筆者>

とあり、これを確かめることができる。榻³⁵⁾は筵などとは異った台状の座具と考えられる。このことは「開元禮」蕃主奉見で殿上に設けられた蕃主の座が牀座³⁶⁾とされたことからみても頷くことが出来よう。

皇帝の座具はこの様なものであったが昇殿者は解劍席で沓を脱ぎ階を昇ったのである。因みに「開元禮」に収められた大極殿以外の明堂などでの儀式についても同様の点から概観すると、昇殿(堂)者が脱履する例は多く³⁷⁾、我々が研究開始時抱いていた、彼の国に於いては沓のまま昇殿したのではないか、という予想とはかけ離れたものとなっていた。特に釋奠についてみると、我国のそれは中国の影響を強くうけた儀式とされ沓を履いたまま都堂に昇殿するが、「開元禮」に於いては脱履する、のが我国とは対照的であった³⁸⁾。この様な点からすれば沓の着脱についての記述は特にないが、平敷が御座として用いられた皇帝元服に於いても、我国の太政大臣・大臣の役割りを果たす昇殿者(太師、太尉)は沓を脱いだ可能性が高いと推される。

以上の様に彼の国では、皇帝の御座として平敷とは異なる台状の座具も用いられたにもかかわらず昇殿者は沓を脱いでおり、また太極殿ではないが次に紹介する「礼記」の内容をも併せ鑑みた時、昇殿者の沓の着脱の選択は皇帝の座具の違いによってなされたということは難しいだろう。

「礼記」は、孔子の死後その弟子達が礼について師から伝聞したり、あるいは彼等同士で話し合ったりしたことを記録し集録したものであり、晋より以前の漢代に成立したとされている。卷第一・曲礼上には³⁹⁾

侍坐於長者、屣不上於堂(屣賤。空則不陳於尊者之側。)解屣不敢當階。(爲妨後升者。)就屣跪而擧之、屏於側。(謂獨退也。就猶著也。屏亦不當階。)郷長者而屣、跪而還屣、俯而納屣。

(謂長者送之也。不得屏、遷之而已。俯俛也。納内也。遷或爲遷。)という一文があり、長者に侍座する時は履を履いたまま堂上に昇ってはいけない、何故ならば脱いだ履を長者のそばに並べておくことは出来ないからであると説かれている。また巻第十七・少儀にも排闥説履於戸内者、一人而已矣。(雖衆敵、猶有所尊也。有尊長在則否。(在在内也。後來之衆、皆説履於戶外。))

と記され、この場合は、昇殿時と明確にはないものの、最年長者が室内に居る時はあとから来たものは室外で履を脱いだことが知られる。これら長者あるいは最年長者の座具については知られないが「礼記」を通覧した限りでは椅子ではなく筵の類であったものと考えられる。昇殿者は、長者あるいは最年長者に敬意を表し沓を脱いだものと理解され、貴人のそばでは脱沓が基本であったと考えられる。

「隋書」⁴⁰⁾ 志第七・禮儀七には儀式に参加する者の帶剣⁴¹⁾について以下の様な記載がある。沓についても知られる興味深い内容となっているので少し長いが紹介することにしよう。

劍、案漢自天子至于百官、無不佩力。蔡謨議云…「大臣優禮、皆劍履上殿。非侍臣、解之。」蓋防刃也。近代以木、未詳所起。東齊著令、謂爲象劍。周武帝時、百官燕會、並帶刀升座。至開皇初、因襲舊式、朝服登殿、亦不解焉。十二年、因蔡徵上事、始制凡朝會應登殿坐者、劍履俱脫。其不坐者、勅召奏事及須升殿、亦就席解劍、乃登。納言、黃門、内史令、侍郎、舍人、既夾侍之官、則不脫。其劍皆眞刃、非假。既合舊典、弘制依定。又準晉成康元年定令故事、自天子已下、皆衣冠帶劍。今天子則玉具火珠鏤首、餘皆玉鏤首。唯侍臣帶劍上殿、自王公已下、非殊禮引升殿、皆就席解而後升。六品以下、無佩綬者、皆不帶。

即ち、周代の武帝の時、百官は帶刀して昇殿(座)したが、隋の開皇12年(592)には朝会で昇殿する者は剣を外し沓を脱ぐ様になったこと、但し夾侍之官、侍臣については帶剣したまま昇殿してしても良かったことなどが知られる。夾侍之官、侍臣は、皇帝の近臣である。

さらに具体的に知るためには同書に続いて記される沓に関する説明が相応しいだろう。

履、舄、…<中略>…諸非侍臣、皆脫而升殿。

侍臣でない者は昇殿する際に沓を脱いだというのである。前の帶剣に関する文も併せ考えると、儀式に参加した王公以下は昇殿に際し剣を外した沓を脱いだ、侍臣はこれらを着けたまま昇殿したことになる。これは前に「開元礼」の朝賀および會でみた王公らが解劍席で剣をはずし、沓を脱いで昇殿した内容とまさに一致する。

「礼記」「隋書」の内容はそれぞれ異なるが、共通するのは昇殿者の殿上の貴人への作法あるいは対応という観点から述べられていることであって、貴人の座具の種類の点からではないということである。

我国の「北山抄」には、昇殿者が沓を脱ぐのは天皇の御座が平敷であるためという理由が記されてあったが、中国に於いては全く違っていたことになる。

それでは何故我国では天皇元服について後に「北山抄」に記される様な理解がされるようになったのだろうか。「北山抄」に先行する「新儀式」あるいは「西宮記」にこの様な理由は記されていない。これに対し現在までのところ次の様なことが推測される⁴²⁾。まずあげられるのは清涼殿東庇に設けられた天皇の御座が平敷であったことである。天皇がこの御座に出御した時には、王卿は東孫庇に候し

たがその際には当然沓を脱いだであろう⁴³⁾。次は、貴族住宅に於ける用法である。貴族住宅に於ける最も重要な儀式・大臣大饗はすでに9世紀末には成立していたが尊者を初めとする公卿らの座は平敷であり諸記録に示されるように昇殿に際して彼らは沓を脱いでいた。普段の生活に於いても同様であったであろう。要するに清涼殿に於ける天皇の普段の用法あるいは貴族住宅の使い方が「北山抄」の作者の念頭にあったものと思われる。このことは取りも直さず当時の貴族達がその様に考えていたことを意味している。「愚昧別記」建立元年(1190)正月3日条⁴⁴⁾に、後鳥羽天皇元服に関し右大臣実房が元服儀の装束を前もって点検したことについて

先向南殿、見御装束之儀(不著沓、供平敷御座之故也)

とされるのもこの様な背景があったがためと解されるのである。

実は天皇元服は清和天皇が最初の例であり、それ以前は元服後に即位していた。前例のないこの儀式を行うにあたり唐禮を導入し、従って天皇の御座を平敷となし、また公卿(太政大臣・大臣)は沓を脱いで昇殿することになった。この方式はそれまで行われてきた節会等の方式と異なっていたため当時は新鮮に映ったものと思われる。前に紹介した「新儀式」に特に唐禮云々と記されたのもこの様な背景があったからではないだろうか。元服時に於ける昇殿者の脱沓の要因は唐禮の導入にあると見ることが出来るのである。

結

平安宮内裏紫宸殿での諸儀式について天皇および公卿らの沓の着脱の実態をそれぞれが用いた座具に着目しながら明らかにし、特に昇殿時に於ける公卿らの脱沓の要因とその意味について考えてきた。

公卿らが沓を脱いで昇殿するのは、天皇の御座が椅子や大床子ではなく平敷御座の場合に於いてであり、天皇元服に於ける太政大臣および大臣にこれを見ることが出来た。天皇元服は清和天皇の代から中国・唐禮の方式で行われてきたが、天皇の御座を平敷とし、また昇殿者が沓を脱ぐ方式もこの時期から受けつがれてきたものと考えられる。後の「北山抄」は昇殿の際に沓を脱ぐのは天皇の御座が平敷であるためと解釈した。然しながら中国に於いては唐代の「大唐開元禮」の諸儀式にみられる様に「北山抄」とは異っており、寧ろ沓を脱ぐのは「礼記」に具体的に記されるよう、殿上の貴人を敬うためであり、また「隋書」に示されるよう、沓を脱いで昇殿するのは皇帝の侍臣以外の者達であった。いずれも、殿上の貴人の座具の種類がその理由とはなされていない。「北山抄」の記述は、平敷を用い沓を脱いで昇殿していた我国の当時の天皇御在所・清涼殿や貴族住宅の用法の背景の中で理解すべきと考えられる。

さて、最後に大きな問題が残されることになった。それは我国紫宸殿で行われた節会等に於いて何故公卿らは沓を履いたまま昇殿したのか、またそれは何時からなのか、即ち建築史的観点からの我国儀式さらには古代中国の儀式の変遷過程の解明である。今後の課題としたい。

謝辞

「晋書」「新唐書」「隋書」等の解釈や、天皇元服の歴史的意義については東北大学文学部の吉田欽氏に大変お世話になった。末筆ながらここに記し謝意を表したい。

相撲節。藏人方非沙汰。但行事藏人臨之。監之。惡御帳雖令立障子。裝束使進止也。依爲南殿儀也。

図一 2 相撲節指図 (雲岡抄による)

相撲節。藏人方非沙汰。裝束使進止也。依爲南殿儀也。但行事藏人當監之。漢卿最進令立贊士。

- 1) 平安京紫宸殿の建築様式について QUADRATOIII、
文化学院建築科 1988年2月
- 2) 鈴木亘氏も註1論文に於いて天皇元服時の脱靴の例を紹介はして
いる。しかしながら脱沓の要因については触れていない。
- 3) 「類従国史」等によれば、元日節会は平安当初、前殿(紫宸殿)
が会場とされたが、弘仁のうちの僅か一時期、豊楽殿に移りその
後再び紫宸殿が会場となったことが知られる。また「江家次第」
等の儀式書や貴族達の日記によれば、平安期に於いて座具や沓の
着脱についての変遷はなかったものと考えられる。
- 4) 新訂増補故實叢書。
- 5) 割註については()で示すことにする。以下同じ。
- 6) 「群書類従」巻八十五。
- 7) 「關白ひさしの二間のまへにさぶらひて笏をさして御裾をとる。
藏人頭御さうかいをたてまつる。」とある。
- 8) 「群書類従」巻第百十六。“天子尋常ニメス。幼主ノ時ハ糸鞋ヲ
行フ”とある。
- 9) 殿上に着座することを謝するための拝礼。
- 10) 賜酒を謝するための礼。
- 11) 「群書類従」巻八十九。
- 12) 「三節会次第」には、“出月華門脱靴着浅履”と記されている。
同書は一条兼良(1402~1481)の作とされ、この時期の内裏は土
御門内裏であり、西礼のため月華門が日華門の役割を果たしてい
た。
- 13) 「江家次第」等の儀式書以外の貴族の日記等にはこれらに関する
記載はほとんど見られない。
- 14) 「九條年中行事」群書類従、巻八十三。日華門で浅履にはきかえ
たものと思われる。
- 15) 「群書類従」巻八十二。
- 16) 「江家次第」
- 17) 「四條院御元服記」仁治2年(1241)正月5日の四條天皇の元服に
ついて、“女官撤齒立之”とある。また「高倉院御元服記」嘉応
3年(1171)正月3日の高倉天皇の元服に関する記述にも同様の内
容がある。
- 18) 「玉葉」嘉応3年(1171)正月3日条。
- 19) 「名目抄」(「群書類従」巻第四百六十八)には、絲鞋(幼主之
時著之、又樂人舞人、著襲時著之)とある。
- 20) 草鞋(ワカイ)はワラグツのことであり、本来の天皇の履物ではな
い。ここでの草鞋は挿鞋のことと考えられる。挿鞋(ワカイ)は天
皇が殿上で履く沓である。
- 21) 「殿曆」永久元年(1113)正月1日条によると、“主上還御、圖
司歸入、閤門、諸衛解陣、主上脱御靴、著草鞋”とある。この
草鞋も挿鞋のことと思われる。

- 22) 高倉天皇の元服に関する条。
- 23) 太政大臣はこれに先だち行われた北廂での理髪に立ち合い、ここから降殿したものと思われ、大臣は陣座に控えていたものと考えられる。
- 24) 平敷の御座の略で、椅子や床子を用いず床に畳や敷物を敷いて座にしたものをいう。
- 25) 「群書類従」巻第八十。
- 26) 汲古書院、昭和47年。
- 27) 「通典」巻第一百二十二には、
“先一日、尚舍奉御設御冠席於太極殿中楹間、南向、莚筵紛純、加藻席纁純、加次席黼純”。と記される。
- 28) 中華書局
- 29) 新訂増補故實叢書。
- 30) 歌者琴瑟。
- 31) 中華書局。
- 32) 中華書局。
- 33) 中華書局。
- 34) 三秦出版社出版。なお本書は近衛本を底本としており、割注部分は近衛家熙が旧唐書、新唐書を参照して書き加えたものである。本論で紹介した「旧唐書」「新唐書」「唐六典」を対照すると家熙の指摘は妥当であることがわかる。
- 35) ゆか、こしかけ、ねだいの意。
- 36) ゆか、こしかけ、ねだいの意。
- 37) 巻四・皇帝冬至祀門丘、巻五十二・皇帝皇太子視学、巻九十九・皇帝於明堂誥孟春など。
- 38) 巻五十三・皇太子釋奠於孔宣父。
- 39) 全釈漢文大系、集英社、昭和51年。
- 40) 中華書局。
- 41) なお、帯剣については、儀式とは直接の関係はないが、小林聡：魏晉南北朝時代の帯剣・簪筆に関する規定について―梁の武帝による着用規定の改変を中心に、埼玉大学紀要、第46巻第1号、1997、の研究がある。
- 42) 「北山抄」とい、これが書かれた時点で、平敷御座の前では公卿が脱着したという事実が存在したことが知られる。これを紫宸殿以外に求めるならば、まず清凉殿をあげるのが極く自然であろう。
- 43) この代表的な例として、叙位があげられる。「江家次第」によれば、公卿らは殿上に昇り、その後、東孫庇に設けられた御前座に進んでいる。天皇御座は「雲図抄」によれば御半帖とあり、平敷の部類に入る。また「大内裏図考證」によれば殿上には沓脱が設けられていた。叙位は「北山抄」にも記載があり、この様な関係は当然理解されていたものと考えられる。
- 44) 管見によれば、脱着の要因について記した平安期の記録では「北山抄」とこれ以外見当たらない。

NII-Electronic Library Service